

<https://socialistproject.ca/2021/11/why-our-climate-isnt-jumping-for-joy-after-cop26/>

2021年11月22日

カナダ社会主義プロジェクト紙

「COP26: 大喜びできない理由」

Why Our Climate Isn't Jumping for Joy After COP26

リード

第26回締約国会議(COP)は2つの成果をもたらした。一つは来年も同じ会議が持たれるということ、もう一つは世界の指導者が気温上昇を1.5度未満に維持したいという願望で一致したこと。

2週のあいだ、昼は激しい議論、夜は企業が資金提供するカクテルパーティーが続いた。

各国は石炭の「段階的廃止」に同意しかかったが、結局各国の努力に任されることになった。化石燃料の補助金についての合意も徹底的に薄められた。

言葉、そして言葉

数千の文書が提出された。焦点が当てられるのは、すべての化石燃料ではなく石炭にあることは明らかだった。

それは先進国(日本を除く)ではもはや意味がなく、中国・インドを含む途上国にのみ課せられた課題だった。

強硬な石炭廃止派の人々は、補助金給付については何も述べなかった。インドと中国を非難するのはコストが掛からないし、自分たちに好都合だったからだ。

気候への財政支援

会議に出席した中国代表は、非常に筋の通った発言をした。

まず彼は、「中国はエネルギー転換を非常に重要視している」と述べた。その上で2つの困難を指摘した。

第一に、「誰もが電気にアクセスできるわけではなく、エネルギー供給が不十分である」ということだ。この認識を前提にしながら話を進めなければ、エネルギー転換はありえない。

世界の人口のうち約10億人はまだ電気に接続していない。彼らのほとんどは途上国の、したがって石炭の国の住民だ。明日石炭を切ることは、その人々を電気のない生活に追い込むことになる。

第二に、非難の言葉より「具体的な行動が必要です」とし、中国もふくめた先進国が合意した年間1,000億ドルの「グリーン気候基金」を拠出するよう求めた。

企業幹部はラジオ体操のスタンプをもらうように群がった。彼らはホテルやレストランに群がり、政府の指導者やチャールズ皇太子とのプライベートミーティングを開催した。

国際商業会議所は政府に「目を覚ます」ように言ったが、自分が目を覚ます気はないようだった。

## 市民サミット

最も鋭い告発は、NGO「貧困への戦い」からのものだった。

「南の子供たちがいま死にかけているときに、金持ちが自分の子供や孫の将来について話すことは不道徳です」